

# 神とただびと

朔月京物の怪語り

沙藤 堇

*Sumire Sato*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

插画  
旭炬



目次

序章 白菊のはなし

7

山の章

一 帰郷

25

二 天狗の街

76

間章 菖蒲のはなし

105

都の章

一 入内

121

二 月白

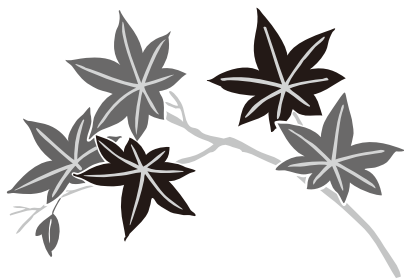
174

終章

234

あとがき

244



【登場人物紹介】

〈登花楼の住人〉

伊織いおり……主人公。雑色募集に働くことになった

桃花ももか……登花楼の主。物の怪の友達が多い

菖蒲あやめ……桃花を主と大切にする実質的経営者

青葉あおば……力自慢で雑駁な性格の荒事担当

白菊しらぎく……性別不詳の美貌を誇る呪術担当

月白つきしろ……夜の神、月黄泉の仮の姿。使用人

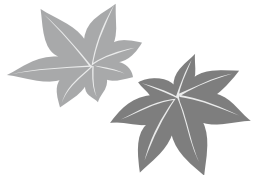
清河院きよかわいん……白蓮京最高権力者

滝矢浄盛たきやのよしみ……清河院の戦友であり盟友

春時雨はるしぐれ……蓮台ヶ原に住む妖狐

六太むくた（胡蝶丸）……物の怪の祭りの夜、桃花と出会った少年

結ゆい……伊織の姉



神とただびと

朔月京物の怪語り



## 序章 白菊のはなし



歩を進めるたびに身体が透け、ゆら、ゆら、と震えるのが困りものであった。真っ直ぐに進めない。

もはや足は地についていないのだから、いっそ宙に浮き滑って行った方が楽な気がするのだが、生憎やり方が分からぬのだった。

幽鬼などはどうやってあの滑らかな浮遊を会得するのであろう。先達の幽鬼仲間にも教えて貰うのであろうか。

しかし私は残念な事にその幽鬼からすら見られていないらしいし、師匠を見出すのは難しそうだ。

つらつらと考えているうちに、いよいよ指先が形を失い、袖の先が夜風に溶けて見えなくなってきた。このまま順調に形を失っていくと、遠からず欠片

も残さず立ち消えてしまうだろう。

はて。己が消えるとは、どういった事であろう。しばし考えて立ち止まったが、すぐにまた歩き出す。まあ、消えてみれば分かるであろう。

納得はしたが、行く当てはない。

ただ足の向く方に歩いてはいるが、常に何かしらを命じられていた身にとって、己の意思で動くというのは、何とも心許ない事でもあった。

分かるのは、ただ、もうすぐ己が消えるのだ、という事のみ。

ふむ、と唸って腕を組んだ。

死者、とは。

確か、風葬の地に行くのではなかったか。

己が死者であるかどうかはまだ分からぬが、とりあえずこれから消えるのだから、遠からず命は失うのだろう。これから死者の仲間入りを果たすのなら、やはりその時は風葬の地に居た方が良からう。

そうだ、蓮台ヶ原に行こう。

ほんと手を打って思い付くと、後はもう悩む事などなかつた。

見上げる月は中天にかかり、皓々として美しい。

中々の月夜である。

真夜中だというのに辺りは騒がしい。どうやらい

ずこかで火事があつたようだ。

陽ノ下との戦といひ遷都といひ、近年望月京

は物騒である。人々は皆不安げに顔を突き合わせ、

噂話に興じていた。盜賊がどこぞの屋敷に火を放

つたそうだとか、人喰い鬼の女が出たとか。

数多の人が通り過ぎたが、誰も己に気付く事はな

かつた。人混みは忙しく、己は透けているのだから

当然であろうが。

肩が何度か当たつたが、勘の鋭そうな男がひとり

「冷たつ」と呟いただけに終わった。やはりいよいよ

消える時が近付いているようだ。

ただひたすらに足を動かし続けて望月京を抜け、野原を越えようと、やがて蓮台ヶ原に辿り着いた。

白い骨が軋がり、石造りの灯笼が立っている。青  
白い柳の細い枝が揺れ、霜が降りて地は白い。

目の端に異物が映り、微かに眉を上げた。

何かが軋がつている。白い地に、鮮やかな赤。

一人の女が、俯せに横たわつていた。

血塗れで、骨を手に握つてゐる。地を骨で突いて

いたらしく、赤土が抉れてゐた。

額にうつすら角が盛り上がつてゐるのを見ると、

鬼であるらしいが、人の気配も濃い。赤みの強い髪

が炎のようである。

面妖な。これは何であろう。

思いはしたが、すぐに気が逸れた。どうせなら蓮

台ヶ原の中央にでも行こうと、真つ直ぐ歩く。

すると足が、何か生温かく柔らかいものを踏みつ

けた。女の上で足を持ち上げて、首を傾げる。

足がある。何かを踏んでいる。

はて。

何にも触れぬ姿になつていた筈なのだが。



思い当たる原因は、足の下で倒れている女しかない。とりあえず、人に乗っているままでは足下が定まらぬので地面に降りた。

そして、女を見下ろしながら、まばたきをする。途端に、目の前の景色が変わった。骨と石灯籠と地面が消え、極彩色の、光の粒の群れになる。

銀。白。青。黄。そして赤。

ほうほうに飛び回りながら、暗闇くらやみの中を躍っている。銀は月。白は霜。青は死者。それぞれの気配が光の粒になって飛び回っているのだ。

足下から吹き上がるのは、血よりもなお赤い深緋ふかひ色の光の粒だった。女の気配は逆巻きながら噴き出して、猛烈に溢あふれている。

ああ、この女は光まで赤いのか。

炎のようだ。本物の炎ではないのだが、何とはなしに暖かそうである。

丁度良い。当たらせて貰おう。ずっと寒かったのだ。もう、思い出せないくらい、長い間。

焚たき火びに当たる要領でしゃがみこみ、女の角に手をかざす。

あまり長い間極彩色の世界を見てみると、目が眩くらむ。まばたきをして元の景色を見ると、ゆらゆらと透けていた両手が、明らかに肉を持っていた。

「ふむ」

かくんと首を傾げたら、声が出た。己の口が息を吐き、あまつさえ音を発しているらしい。

両手を握って、開いて、握る。

おそらく、女からまき散らされる赤い粒が、己の身体に当たって、幾分か染みこんだのであろう。

激しく狂おしい、緋色に染まった想いの粒。それが、たまたま近くにやって来た、空の器に染み渡ったのだ。人の感情は近くに居るだけで移る。

しゃがんだまま頬杖ほおづえについて、黙考した。

つまり、この女が居る限り、己は消えないらしい。だが、女は死にかけている。

女の命を喰い荒らしているのは、身に余る鬼の力

のようだ。元は人間だったものが、恨みを溜めこみ鬼になったのだろう。根性のある事である。

半化生はんけしやうである者同士、力の行き来は容易だ。

この女がただ倒れているだけで、己は肉を取り戻した。つまり、逆もまたしかりである筈。

治してみようか。

誰に命じられた訳でもなくそう思いついたのは僥倖ぎやうじやうであった。特に止める者もなかったので、女の肩を押して仰向けあおむにすると、刀印を切った。

当たり前に周囲に存在している力に、ひそやかに呼びかける。力を貸してはくれないかと。

地も、大気も、星も、呼べばすぐに応じてくれる。それぞれが持つ力が粒になって、己の身体に飛びこんで来る。その力を身体からだの中心で練り上げ、指で素早く印を切れば、勝手に雷光が指先に宿る。己にとって、ごく当たり前の事である。

ただ、力を使えば自おのずと身体もまた透けていく。さつき身体に飛びこんだ赤い粒が、どんどん抜けて

行くのが分かる。

腕が透け足が消え、指先だけが雷を宿して浮いている。一応始めたのなら最後まで治そうと、女の額に指を押し当てた。

途端に、身を喰い荒らす鬼の妖力が向きを変えて、正しく巡り始めた。今まで身体を蝕むしばみ喰い荒らしていた力が、肉や骨を強くし流れ始める。

それと同時に、鮮烈な紅い粒が、再びちらちらと己の周囲を漂った。形をなくしていた身体に染みこみ、再び目に映るようになってくる。

少し力の流れをいじっただけで、勝手に強くなつていくのは、この女の命の力が強いからであろう。

結局大した手助けもないまま、やがて女は安らかな息をし始めた。

もう良からうと手を離して、膝ひざの上に両手を置いた拍子ひょうしに、耳にかけていた髪が、ぱさりと落ちて肩上で揺れた。とうとう髪まで戻つたらしい。身体に重みはないが、もう触れられぬ場所はない。

「はて」

戻ったはいいが、行く当てもなし。

この女の元を離ればまた消えるかも知れぬ。ならば、わざわざ遠くに行く意味もあるまい。

する事がないので膝を抱えて座りこみ、女の顔を眺めていた。

胸は穏やかに上下しているが、顔に浮かんでいるのは苦悶の表情である。何ぞ悪い夢でも見ているのか、鱗割れた唇から呻き声が漏れた。

「……し……」

し、とは、何であろう。

この女は何を言おうとしているのかと、想像を巡らせ、『し』から始まる言葉を思い浮かべた。

霜。白鷺。笙。東雲。蜩。書物。白露。死霊。

女の手がびくりと動いた。臉が震えて、うつすらと目が開く。月の輝きを照り返して光を宿す、美しい瞳であった。

女はほんやりと夜空を眺めていたが、もう一寝入

りしようとしたのであろうか。

腕を枕にして、ごろんと身体を横に向けた。

一度閉じかけた臉が、女のものではない靴を見つけて、開かれる。女がこちらを向く。

目が合った。

「……っ！」

弾かれたように、女が起きて飛び退った。

人の目に触れるというのは、中々久しぶりの事である。生きて動く女の命の力が溢れ、ぱちぱちと火の粉を散らす。焚き火のようだ。

暖かい。

そう思いながら、しかし特にやるべき事も考え付かなかったので、さっきの続きをまた考える。

注連縄。式神。清水。鹿。白雪。尻。

女が口を開く。

「……な……んだ。お前」

応じようとした丁度その時、口から零れたのは、

「白菊」

今しがた考えていた言葉であった。

いや、そういう事じゃねえんだけど、と女が口の中で呟いた。ではどういう事であろう、と首を傾げる。しばらく眉根を寄せてこちらを眺めていた女は、ふいっと目を逸らすと立ち上がった。

背に刀を担ぐと、いずこかへと歩いて行く。

傷は癒えた筈であったが、その足取りは重い。

背中に降りしきる月の光が、赤黒い血が乾いて剝がれ落ちる様を映し出していた。

何となく立ち上がり、そのまま小走りです後を追った。このままだと己が消えるから、という理由はあるにはあったが、どちらかと言うと、単につられたのである。

随分長い事、女は歩いてきた。都から離れ、山に分け入り、藪の間にある獣道を歩き続けた。

そして、中天にあった月が山の端に近付いた頃に、切り立った崖から飛び降りたのだった。

自死でもしたのであるか。困った事だ。

術を紡ぎ風を起こして後を追うと、辿り着いたのは谷底に流れる、川のはとりであった。

両側を切り立つ崖に囲まれた、浅くも深くもない川だ。武者の顔を持った蛇が、するすると岩壁を登って行く。幼子程もある鼠が、目を赤く光らせて茂みの陰を走って行く。

随分な距離を落ちたにも拘わらず、女には怪我ひとつなかった。ざぶざぶと膝で水を蹴立てて川の真ん中まで来ると、大きく息を吸い、潜った。

後を追って川に入ると、蹲った女が、ゆらゆらと歪んで水底に沈んでいるのが見える。身に纏った毛皮から、薄く赤い血が筋になって流れていった。幾本もの赤い糸が、女の身体から伸びている。

やがて、ざばりと水飛沫を上げて、女が立ち上がった。小さな滝となつて、髪や衣から、赤い水が流れ落ちている。小刻みに震えながら息を吐いた女は、額に張り付いた髪を掻き上げて顔を上げた。

目が合った。

「いつ！」

瞬間、大きく飛び退られた。二度目である。

女は、野生の狼のような動きと、驚くべき速さで岸を踏む。川に取り残されてしばしほんやりしたが、水が恐ろしく冷たいので無言で上がる。この女は全身濡れそぼっているが、寒くないのだろうか。

女の傍まで歩くと、射貫くような目で睨みつけられた。特に何も感じないので見返す。女の目は毛を逆立てた獣のそれに相違なかった。懐く事を許さぬ野性。火花すら散りそうな眼差しを向けられると、意識をして見てもいないのに、女の身体から赤い光の粒が溢れ出ているのが分かるようだった。

ほんやりしているうちに、女が目を逸らした。

ぶるぶると頭を振って雫を飛ばしながら、岩壁へ向かう。崖には細い裂け目が穿たれていた。女が身を滑りこませたとところを見ると、洞窟なのであろう。中に入ると、水を含んだ毛皮をべしゃりと踏んだ。女の纏っていた衣である。外より暗かったが、何度

かまばたきをすると中が見えた。

蜘蛛の巣のごとき罅割れが岩壁に刻まれている、暗い洞窟だ。罅のすぐ下で、女が毛皮にくるまって横になっていた。こちらに背を向け、枕元に刀を置いている。ここは、どうやら女の住処であるらしい。これから眠るのであろう。

納得をして足を踏み出した時、

「近付くな」

針のように鋭い制止をかけられた。

「うむ」

頷いて、その場で腰を下ろした。岩は硬かったが、渴いていて暖かいので居心地は悪くない。

そのまま身体を横に倒して、膝を抱える。

身体が透けている時は必要なかったが、何となく今は、眠りたい気がしたのだ。

目を閉じたら、本当に眠気が訪れた。いつぶりだったか思い出せぬまま、夢も見ず深く眠った。目覚めたら、火が焚かれていた。

焚き火の前に女が居た。川で獲つて来たのか魚を焼いている。魚から垂れた脂がじゅつと音を立てて、燃える枝の上で煙となった。焼けた魚の香りが鼻を抜けた。洞窟の入り口から陽が差しこんでいる。

朝のようだった。

暖かい。

ぼんやり焚き火を眺めていると、向かい側であぐらをかいていた女は眉根を寄せた。魚を喰らっている彼女の脇には細い骨が小山になっていて、焚き火にはまだ、三尾の魚が炙られてゐる。大刀を手元に置いた女は小骨を吐いて、低く呟いた。

「白菊、だったか」

一拍置いて、己に対する問いかけだと気付いた。

更にもう少し考えて、昨日零した言葉を名前だと受け取られていたらしい、と思ひ至る。

名前などついで呼ばれた事はなかった。生家の者は、己に名前を付けなかった。

あの時、もう少し女の目覚めが早ければ、尻とい

う名前になっていたのだろうなと思ひながら、訂正をする必要も感じなかったたので頷いた。

「うむ。我が名は白菊」

その途端、身体が肉が温かみを持った。地についてた足が岩を踏みしめ、じやりつと砂が音を立てた。

流石に驚いて目を見開く。

身体が重い。音のする程に何かを踏みしめるなど、初めての経験である。肉があつても重みはなく、雪の上でも足跡を残した事はなかったというのに。

つくづく己の掌を眺めていると、手首のあたりがとくとくと震えているのが分かった。

まるで人のようである。

名前が、身体をこの世に結いつけたのだろうか。

その震える速さが一定であるのが面白くて、手首にじつと触れていると、女は無言で腕を組んだ。

「青葉だ」

女は青葉と言うらしい。名を交換するなど、初めてである。まるで人のようではないか。

胸が浮き立った。焚き火の輝きが増す。魚の骨が転がる岩の床が、心地よく感じる。

これが、愉快という気持ちなのだろうか。

「あたしを治したのは、お前か」

「うむ」

「何で、そんな事をした」

「私が消えるからだ。青葉を治せば私は消えない」

青葉が戸惑ったように頭を掻く。眼差しに宿るのは疑惑であり、嫌悪でも拒絶でもない。

その事が更に、辺りの景色を明るくする。

「分かるように話せ」

粗雑な言い方ではあったが怒声ではない。ただ知りたいだけのようである。刀を持っているのに、使う気配はない。殴るつもりもないらしい。

何と、奇妙な人間であるのか。

何だか、全てを最初から話してやりたくなかった。

「うむ。それでは、ひとつ、昔話をしよう」

大きく頷いて、慣れ親しんだ書物を思い出す。

はあ？ と奇妙な声を出す青葉に構わず、書物に記されている語り口を思い出し、口に乗せる。

「昔々、といっても、それ程昔ではない昔、あるところに、貧しい一家の家長が居た。

男は、仕事帰りのある日、一匹の蛇が、蛙を食べようとしているのを見つけてしまう。

つい、蛙が可哀想になった男は、

『これ、そこの蛇。蛙を食べるのは止めなさい。食べないでくれたら、うちの子と結婚させてやろう』

そう蛇に呼びかけた。

すると、蛇はびたりと動きを止めた。男の顔を真っ直ぐ見て、蛙を食べずにするすると草むらへ消えて行つた。助かった蛙も、また同じように消えた。

不思議な事もあるものだ、と家に帰つた男がその晩眠っていると、戸を叩く者がある。

こんな夜中に誰であろうと開けてみると、世にも美しい女が扉の前に立っていた。

『息子さんと、結婚させてもらいに来ました』

ははあ、これは帰りに見た蛇なのだど気付いた男は、どうしたものかと考え、

『貴方あなたの真心が本物かどうか、試させて下さい。試す方法は、明日お伝えします』

と言つてその場を切り抜けた。

彼には息子が三人居た。いずれも大切な息子達だ。蛇の婿むこにするわけにはいかない。

さてどうしようと井戸端で悩んでいると、もしもし、と小さな声に呼び止められた。

井戸の端に居るのは、今日助けた蛙かだった。

『貴方の庭の一番高い木の一番高い枝に、鷹たかの巢ねがあります。蛇に、その卵が欲しいと言うのです』

蛙の言うとおりに、次の晩にやつて来た女にそう言うと、女は、分かりました、と答えて背を向けた。

そして、蛇の身に転じてするすると木の枝を登ると、卵をひとつくわえて降りようとした。

ところが、それに怒つた母鳥が、蛇をつついて喰い殺そうとした。蛙の狙ねらいはそれだったのだ。

けれど、もうすぐ蛇が鷹に喰われて死ぬという時、男の息子が、小石を投げて鷹を追い払つた。

蛇は無事に卵をくわえて枝を降りると、人の身に転じて、男のもとへ卵を届けた。男は息子を叱しかろうとしたが、息子は女を嫁にしたいと言ひ出した。

その美しさに、惚ほれたのだと。

結局息子は、反対を押し切り、蛇の女を嫁にした。だが、女はただ美しいだけだった。

人の心を解さず、冷たかった。やがて息子は女に飽き、よそに女を作り始めた。

しかし、女は冷たくはあつたが息子を愛していたのだという。他所よその女に嫉妬しつとをして、相手をくびり殺し、息子が逃げると追ひかけて縛りつけたのだ。

息子を絡かめ取り七日七晩過ぎた女は、やがてひとつ卵を産み、喜んで夫に見せた。

その子供は美しかったが、背中にはいちめん、白い鱗うろこが生えていた。重さはなく、触れると冷たく、時折半透明に透けた。



息子は子供をひどく気味悪がり、女ともども化け物と罵ののしった。

女は嘆き悲しみ、悲しみは憎しみに変わり、狂気に転じ、思い余つて夫を食い殺した。

そして食い殺した後、夫がこの世に居ない事を嘆き、抜け殻のようになった。

やがてその無残な死体を見つけた息子の兄弟や父母は手に手に棒を持ち、蛇を打ち殺した。

そうして、卵から生まれた子供だけが残された。

その子供は、髪の色が男とよく似ていたらしい。

父母兄弟は、死んだ男の面影おもかげを子供に重ねた為に殺せず、家で厳しく見張り、育てる事にした。

その家は代々陰陽師おんみょうじの家系で、化け物を封じる心得は、多少なりともあったのだ。まあ、蛇の女に息子を喰われる程度の力だったかな。

そんなわけで、子供は幼い頃より書庫で本を読みながら育った。貧しいから、あまり沢山の本はなかった。

しかし、生まれのせいかな、見よう見まねで簡単な術を試したら、何年も修行した叔父達や祖父よりもよっぽど上手うまくこなしてしまった。

彼らはその時、子供が金儲けに使えると気付いたのだ。やがて子供は、命ぜられるままに、様々な貴人を呪詛じゅそして殺し、代わりに多額の報酬を得た。

傾きかけていた家はあつという間に裕福になり、やがて都一の陰陽一門として名を馳はせるようになる。

そして幾年かが過ぎた。

遷都と戦の影響で、滝矢たきやから数多の呪詛の依頼が家に舞いこんだ。子供は一刻の休息も持てぬまま、言い付けられた依頼をこなし続けた。

そして、心を削り過ぎ、使い過ぎ、人の形を保てなくなつた。身体は透け、触れる事適かなわなくなり、徒人ただびとの目には映らぬようになった。それにつれて術も弱くなり、人を呪い殺す事は出来なくなつた。

使い道のない半化生を養う道理もない。身体が壁を通り過ぎるようになった頃、家の者は

速やかに子供を捨て、どこへなりと行けと放逐した。命じられた事は全て尽きた。消えるという事ならば死ぬのであろうと、子供は風葬の地に向かった。

辿り着いた蓮台ヶ原には、女が一人転がっていた。女の傍に居ると、面妖な事に己の身体が肉を持つ。女は死にかけていた。だから癒やす事にした。起きた女は青葉と言うらしく、話を聞きたがった。

それ故、こうして話しているのだった」  
締めくくって、黙る。青葉は腕を組んでいた。

話を聞く前よりは薄いが、やはり眉間に皺を刻んで、長い長いため息をつく。

もう話す事もないので黙っていると、一言。

「長げえよ」

そう告げて肩をすくめた。

「ここに居る訳を話すだけで自分の生い立ちまで話す奴が居るかよ。あー、もう、やめろよな」

額に手を押し当てて、天を仰いでいる。その額に、もう角はない。

ひとしきり何かを嘆いていた青葉は、ちらりとこちらを見ると、再び長々とため息をついた。

「お前も、一人ってか」

「うむ」

こくりと大きく頷くと、青葉は枝に刺した魚を放つて寄越した。

「しゃあねえな、喰えよ。一応命の恩人だ」

受け取るうと手を伸ばしたが、僅かに遅く、びたんと顔に当たった。熱い。

膝に落ちた魚を拾って食べていると、青葉が顔を背けて身を震わせている。何故かは分からなかった。ひとまず魚は美味であった。

多分、今まで食べた物の中で、一番。

こちらが魚を食べきるまでに、青葉は残り二尾をぺろりと平らげ、洞窟の中を動き回っていた。

寝床にしていた毛皮に、小さな籠や壺を乗せて包んでいる。彼女が、纏めた荷物を弦の張られていない弓に紐で括り、大刀の鞘に引っかけたあたりで、

魚を食べ終わった。

名残惜しく白い骨を舐めていると、火の始末をした青葉が、洞窟を出て行く。後を追って外に出ると、赤みの強い髪と、毛皮を纏った背中が見えた。

「なあ」

声をかけられて、足を止める。

青葉は肩に大刀を引っかけ、口の端を上げている。

こちらに背を向けたまま、顔だけを向けていた。

髪が顔にかかっている。頬は土に汚れて黒ずんで

いたが、瞳は朝日を弾いて輝いている。

「一緒に来るか、白菊」

私は、その時の景色を、一生忘れないだろう。

朝日が澄んだ光を崖の底に注いでいた。谷川の水は清かな音を立て、輝きながら流れて。茂みの枝はしなやかで、地に細い影を落とし揺れていた。

全てが鮮やかに色付き、息をしているようだった。

岩肌も枯れ木も流れる水も晴れた空も美しかった。

何もかもが美しかった。

身体の中に温かな湯が注ぎこまれ、爪先から指先までを満たす。

叫びたいと、何故か思った。

「行く」

深く深く頷いて、青葉の隣に並ぶ。

「どこ行くよ」

気負いなく尋ねられた。胸に溢れかえった湯が、身体に詰めこみ切れなくなつて弾け飛ぶのではないかと思った。しかし、身体は特に不調でもない。

不思議であつたが、ひとまず答える。

「青葉の望む場所へ」

「あたしも行くとこねえんだよ」

「では、占じようか」

自ら何かを提案した事など初めてだった。それでも、これこそが今すべき事だと当然のように思う。

言うが早いか川に歩み寄り、うなじで括った髪を解くと拾った手近な石に紐を結び、投げる。

石は、紐を躍らせながら川底に沈んで行った。

目は閉じた。目に頼るよりやり易い。瞼の裏に、水流になぶられながら落ちて行く石の姿が映る。

ごとん、と耳の奥で石が川底についた音がしたので、無造作に川へと入って石を拾った。

「何やってんだよ」

腕を組んだ青葉が声を上げる。

「水占だ」

応じながら水の滴る石を眺め、落ちた雫を眺める。その波紋と雫の色で、答えが出た。

「望月京の中に行くべき場所がある。示し手は月の神。黄泉の神が人の世に干渉するのは珍しいが、気配が強い。何かある筈だ」

一息にそこまで言うのと、青葉はがりがりと頭を掻いた。黙っているのは、何かを考えているからだろうか。やがてゆっくりと青葉は頷いた。

「運試しもいいだろ。行ってみるか」

水占の出た通りに進むと、巨大な貴族の屋敷に辿り着いた。確か、流行病で死んだ高殿院の屋敷だ

った筈である。

術がかかっているのか、道行く人間は誰一人として屋敷の方に目を向けない。

「ここか？」

青葉はぎゅっと鼻に皺を寄せて舌打ちせんばかりであった。実に嫌そうである。

だが、水占は明らかにこの場所を示しているのだから仕方がない。

巨大な四脚門の戸を叩こうと腕を上げた時、ぎいっと重たい音を立て、ひとりでに門が開いた。

門の向こう側には女が立っている。

鮮やかな女房装束を纏った、美しい女であった。

菖蒲の花が流水の上に描かれた、高価そうな扇で口元を覆っている。

「あら、本当に訪ねて来ているんですわね。あの神、やはり本物だったみたい」

独りごちる声すら艶やかだ。感嘆を覚える程に美しい女というのを、初めて見た。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。